

南スマトラ、コムリン川流域および ムシ川下流部における集落形成史

坪 内 良 博*

Formation of the Settlements along the Komering and the Lower Musi Rivers in South Sumatra

Yoshihiro Tsubouchi*

I 民族の移動と分布の概観

コムリン川 (Air Komering) は、南スマトラ州西部山岳地帯のラナウ湖 (Danau Ranau) に源を有し、パレンバン近辺でムシ川 (Air Musi) に合流する。コムリン川の源からムシ川河口に至る土地には多くの集落が存在するが、ここではこれらの集落の生成と発展に関する記述を試みる。

時代の新旧を無視すれば、この川筋に登場する主な民族は、コムリン人 (Orang Komering), マレー系の諸族, ジャワ島からの移民, およびブギス人 (Orang Bugis) である。コムリン人は現在ランポン州に居住するアブン人 (Abung) と同系統の言語を用い、アブン人と同じ場所を発祥の地と考えている。それはラナウ湖から30~40キロメートル離れたランポン州内の地域リワ (Liwa) 周辺に存在したと考えられるスカラブラック (Sekala Berak) である。[Moehammad Moeslimin n.d.; Funke 1958 & 1961, 1972] コムリン川に沿って下流へ移動したが、中流部のカユアグ

ン (Kayu Agung) あたりに居住するグループが最も下流部へ達したものとみることができる。[Monografie Marga Kaju Agung 1969] マレー系諸族については、その発祥の地はいずれの場合にも明らかでなく、現住地へ移動する直前の祖先の居住地が伝えられるのみである。コムリン川流域においては主として下流域に居住し、コムリン川に並行するムシ川の支流オガン川 (Air Ogan) およびムシ川の全流域に沿っても分布している。ジャワ島からの移民にはスンダ系の者およびジャワ系の者を含む。比較的古い時期にスマトラへ来た者もあるが、多くは20年以内にジャワ島から来住した。政府の外島移民計画によって大規模開墾地へ入り込んだ者と、自力で入植した者 (transmigrasi spontan) とがある。¹⁾ コムリン人およびマレー人が主として川沿いに生活

1) 調査地域における大きな開墾地としては、バトラジャ・マルタプラ、ブリタン、ウパンなどがある。これらの地域に来た外島移民はジャワ人を主体とするが、若干のスンダ人、バリ島人も含まれる。

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

圏を確立しているのに対して，ジャワ島からの移住者は従来これらの者が居住しなかった山岳部あるいは川から離れた土地を利用していることが多く，先住の諸民族と共住する場合には彼らの使用人や小作者となることが多い。ブギス人の移民はムシ川下流部に多くみられ，1965年ごろから漸次到着して定住に入ったものである。彼らはスラウェシ島のボネ (Bone) やワジョ (Wajo) などの出身であるが，現住地に来るまではリアウ (Riau) などに居住していた。

コムリンおよびマレー系の諸族はそれぞれ地域的な小単位を形成している。この小単位はドゥスン (dusun) とよばれ，それ自体で一つの集落を形成することもあるが，カンポン (kampong)，タラン (talang)，ウンブラン (umbulan) などとよばれるより小さい地域集団の結合体である場合もある。いくつかのドゥスンが集まってマルガ (marga) を形成している。マルガの領域はよく規定されており，領域内の土地に関してはマルガの長パッシラ (pasirah) の権限が大きい。しかしながら，同一のマルガに古い居住史をもつ異族が含まれることもあり，また現在のマルガの領域内に昔は複数のマルガが存在したと伝えられる例もある。

集落は戸数の多少にかかわらず集村形態をとることが多い。集落の成立に関してはそれぞれ口碑が伝えられており，一つの集落が草分けとしての共通の祖先をもつ場合が多い。外出者を含めて集落出身者が一般によく認知されており，集落出身者に関して系譜が伝えられている場合もある。人口の膨張あるいは

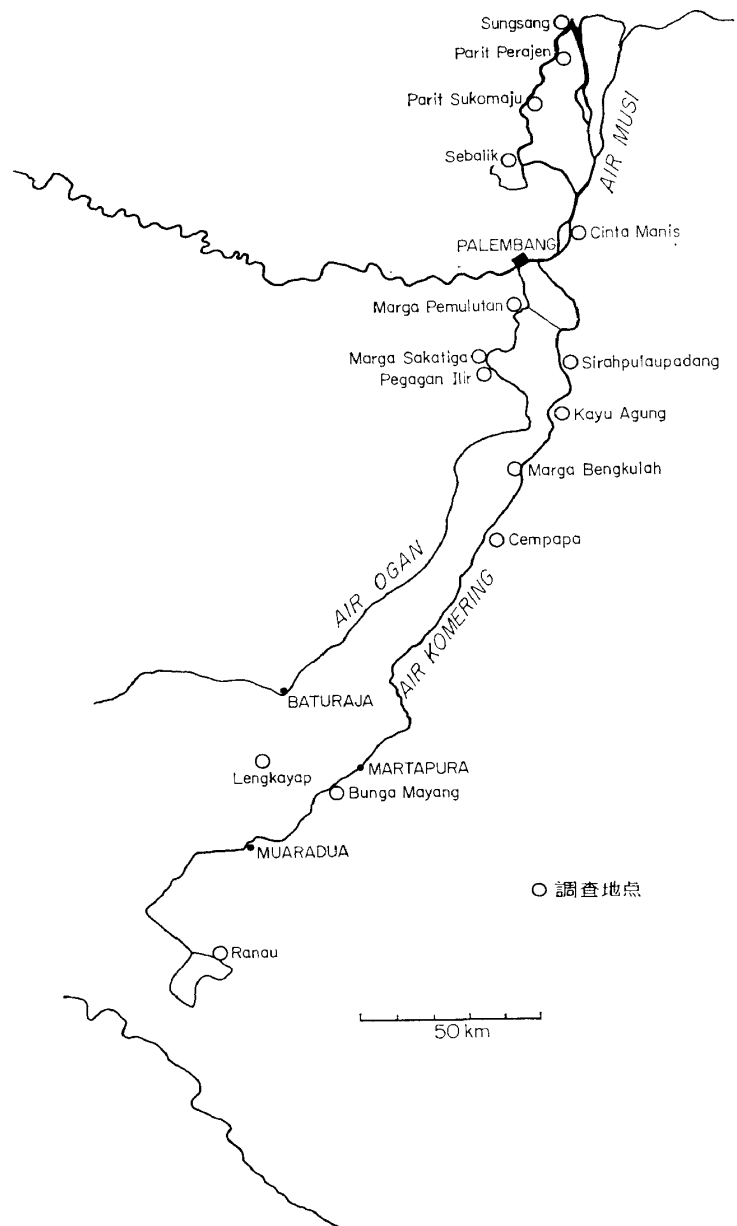


図1 調査地域略図

他の理由による新地域への進出は分村 (pecahan) の形成によって行われ，分出時期が新しい場合にはその時期および親村の名が記憶されている。このような開拓および居住のパターンは山岳地帯からデルタの低湿地帯に至るまで共通して認められる。

この地域における主要な生業は元来焼畑による陸稲の栽培であったが，ある時点から低湿地における減水期稲作あるいは潮汐灌漑の

技術が普及していったものとみられる。他方、山地あるいは水はけの良い土地では、カボック、コーヒー、ゴム、オレンジ、丁字などが陸稲栽培後の焼畑を利用して栽培されるようになった。いわゆる灌漑施設をもつ水田はこの地域全体では未発達で、政府の外島移民計画地域を中心に比較的最近導入された。土地所有は現在では個別的で子孫への相続が一般的になっているが、マルガの共有地としての森林が存在することが多く、これらは人口増加にともなう需要に応じてパッシラの許可を得て開墾され私有地となる。

首長権は元来かなり強かったと考えられ、ごく近い過去までパッシラの地位は父から子への世襲によるものが多かった。[Lipinsky and Kato n.d.] 歴史的にみてこれらの全地域あるいはかなりの部分を統括支配する大首長は存在せず、パレンバンないしジャワの王侯国は、村落国家の首長ともいえるパッシラの祖先達の地位を形式的に安堵してきたに過ぎない。イスラームの伝来はジャワ、セレベス、あるいは西スマトラからの来訪者との関連から説かれることが多く、これらの貴公子が首長の娘と結婚して子孫を設けたという口碑を系譜内にとどめるケースもいくつかある。歴史上のスリビジャヤ帝国はパレンバンに都を築いたとも伝えられるが、各村落国家に関してはこの時代にさかのぼる古い伝承は見当

たらない。コムリン人と共通の起源をもつアブン人に関して、Funke は彼らが首狩りを行なったと述べているが [Funke 1958 & 1961, 1972], コムリン人の間ではそれを確認することができない。アブン人とコムリン人との間に土地の争奪をめぐって戦争が行われたことが伝えられている。マレー諸族の間でも古い時代においては村落に属することが生産および生命の維持のためにきわめて重要であったと考えられる。この考え方は現在でも残っており、自分の村を離れて他村域へ旅することは危険と考える者が多く、強盗の可能性や食物に毒を盛られることが真剣に議論されたりする。このような状況における開拓は、元来人口が少なかった土地が部族社会的状況の下で開発されていった様相を示すものと理解することができるであろう。低平地の開発が国家ないし植民地政府の保護の下に大量の出所も知れぬ人間の移動を含んで行われた東南アジアの大陸部デルタ、とくにメナム・チャオプラヤデルタを典型とするものとは基本的に異なるタイプの開発過程がここでは存在した。村落レベルの開発では制御不可能な低平地において、一方では国家保護下における大開発を起因としてルーズな社会構造が極端にまで顕在化するのに対して、ここでは部族社会的状況を含んだままで空間利用域が拡大するのである。

II ラナウ (Ranau)

スマトラ西部を縦貫する脊梁山脈 (Bukit Barisan) は南スマトラ州を通過する。南スマトラ州の南西端にこの山脈上に位置するスミノン山 (Gunung Seminung, 標高1881メートル) があり、そのふもとにラナウ湖 (水面の海拔標高540メートル) が広がっている。湖の北岸から東岸にかけてランボン系の言語を話す集落が展開し、西北方向の谷沿いにはスモン

ド (Semendo) とよばれるマレー系民族の集落が嵌入する。さらに山岳部にはオガン系やジャワ系の比較的新しい開拓村が立地している。

ランボン系の民族はその起源を湖の南西端から約30キロメートル離れたランボン州のブララウ (Belalau) 平地に有する。彼らの祖先はそこからコムリン (Komerling), スマンカ

(Semangka), スカンプン (Sekampung), スプティ (Seputih), トランバワン (Tulang Bawang) などの河川およびその支流に沿って広がり、全ランボン地方および南スマトラ州の一部に及んだと考えられている。彼らはこの起源の地をスカブラックと呼ぶ。この地には仏教時代の遺跡と思われる小石造建築の跡や大石が各地に残存している。西スマトラのパガルユン (Pagaruyung) から来たウンプ・ブルング (Umpu Belunguh), ウンプ・プルノン (Umpu Pernong), ウンプ・ブルジャランディワイ (Umpu Berjalan di Way) およびウンプ・ニールパ (Umpu Nyerupa) の4人の王子がスカブラックを征服し、イスラーム教を伝播したと伝えられる。4人の王子の直系の子孫は1960年の時点でランボン州のコタブミ (Kotabumi), タンジョンカラ (Tanjung Karang), スンブルジャヤ (Sumburjaya), スカウ (Sukau) に居住していたという。[Moehammad Moeslimin n.d.]

スカブラックの住民の分散は一齊におこったのではなく、長年月の間に段階的に行われたと考えられている。移動の契機には次のようなことが考えられる。(i)スカブラックがイスラーム教徒の手におちて、仏教徒トゥミ人 (Tumi) が同地から追われた。(ii)親族間の争いがおこり、一方の側が新天地を求めて移動した。(iii)バンテン王国とクナリ (Kenali) との間に密接な交渉が生じたとき、領域拡大と旅行の便のため幾組かの家族を道路沿いに住まわせておいた。(iv)慣習法 (adat) によると権利や権力は長子に集中し、年下の子は低い身分しか与えられなかったため、新天地を開いて自分達のつくったアダットの中で地位や身分を手に入れようとした。[Moehammad Moeslimin n.d.]

ラナウ地域にランボン系民族の祖先が居住するようになったのは、イスラームが伝わる前のことと思われる。このことは古い集落の

一つであるジェパラ (Jepara) の近辺に寺院 (candi) とよばれる小石造建築物跡が存在することからも推測される。現在ラナウ湖のまわりの25のドゥスはマルガ・ラナウ (Marga Ranau) に属しており、世帯数5,685, 総人口33,924人を数える。このうち20のドゥスはランボン系の住民を主体としており、世帯数3,150, 人口19,079人を有する。元来マルガ・ラナウは、ワルクック (Warkuk), プマタンリブ (Pematang Ribu), バンディンアグン (Banding Agung) の三つのマルガに分かれていた。それぞれの最も古いドゥスはスカジャヤ (Sukajaya), ジェパラ, バンディンアグンである。いくつかのドゥスについてはその分出したもとのドゥスが分かっている。集落は元来、湖に接近して立地していたと思われるが、道路の整備につれて、高い標高の道路側の位置へ移っていく傾向がみられる。たとえば、グドン (Gedong) の集落は1930年ごろに元村から3.5キロメートル離れて設立された分村グドンバル (Gedong Baru) と1928年ごろに設立された分村スカブミ (Sukabumi) へむかって移動が進み、調査時点においては約10世帯だけが旧集落にとどまっていた。同様の状況はグドンの隣集落パダンラトゥ (Padang Ratu) においてもみられ、この場合は1958年に設立された3.5キロメートル離れたパダンラトゥバル (Padang Ratu Baru) にむかって移動が進行中であるが、グドンと異なり部落長 (krio) はまだもとの集落に居住している。

ジェパラは既に述べたようにマルガ・ラナウで最も古い集落の一つである。もとの集落は現集落の北西1キロメートルにあったといわれ、ランボンとの州境に近いスカジャヤから来たパンゲラン・シンガジュル (Pangeran Singa Juru) に征服され、シンガジュル自身がその地に移り住んだといわれる。タンジョンサリ (Tanjung Sari, 現在のジェパラの南

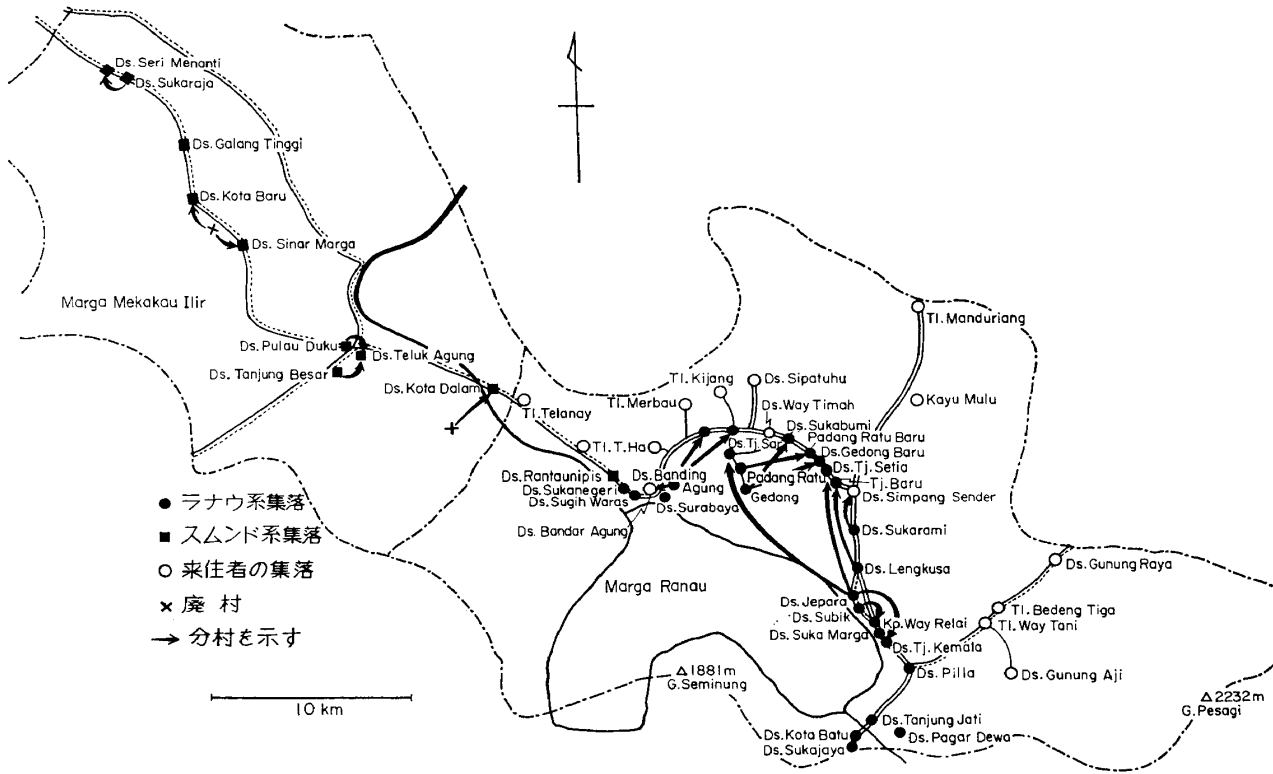


図2 ラナウ近辺の集落とその分村過程

西4キロメートル)、タンジョングマラ、(Tanjung Kemala, 旧名 Suka Rajo, ジェパラ南東4キロメートル)、タンジョンスティア (Tanjung Setia, ジェパラ北方5キロメートル) などはジェパラの分村である。シンガジュルの子孫はジェパラの首長としての地位を継承し続けるが、その15代までの名前が伝わっている。3代めのドパティ・クンバンミボールII (Depati Kumbang Mibor II) はパレンバン王の戦争に加わって戦死してパレンバンに葬られ、10代めのパンゲラン・マンキウダングラ (Pangeran Mangkiuda Ngura) の時代にオランダの支配下に入り、15代めのムハammadスリミン (Muhammad Muslimin) は現在オガンコムリンウル県 (Kabupaten Ogan Komering Ulu) の知事 (Bupati) をつとめてバトラジャ (Batu Raja) に居住するが、ジェパラの慣習法上の首長 (kepala adat) の地位を保ち、3番めの弟がパッシラになっている。

現在のジェパラは81戸、601人より成るが、20年前には72戸、50年前には43戸から成り立っていたという。52年前（1926年）には大火があり約10軒だけ焼け残ったが、集落は同じ場所に再建された。

ドゥスン・ランタウニピス (Dusun Rantaunipis) はマルガ・ラナウの中に嵌入しているスムンド族の集落である。マルガ・ラナウに隣接して世帯数1,015, 人口9,045のマルガ・ムカカウイリル (Marga Mekakau Ilir) がある。このマルガは9個のドゥスンより成り、住民の大部分はスムンドである。スムンドはさらに北方のパスマ (Pasemah) と共通の祖先をもつといわれる母系的なマレー系諸族の一つである。各ドゥスン間の距離はマルガ・ラナウにおけるよりも大きい。スムンドの集落もマルガ・ラナウにおけると同様、道路の近くへと移動しつつある。たとえばマルガ・ラナウとの境界に近いドゥスン・コタダラム

(Dusun Kota Dalam) は3キロメートルほど南西に入ったドゥスン・プマタンパリン (Dusun Pematangpaling) からの移動により成立した。プマタンパリンはこのあたりのスムンドの間では最も古い集落であったといわれ、1920年ごろには30軒ほどあったが、現在ではすべての家が移動して宅地はコーヒー園となり、水田はそのまま残っている。さらに北西15キロメートルに位置していたドゥスン・ブリンビン (Dusun Belimbing) の場合にはもとは80戸ばかりあったが1948年の火災を契機として、北西のドゥスン・コタバル (Dusun Kota Baru) と南東のドゥスン・シナルマルガ (Dusun Sinar Marga) に分かれて新集落を形成した。スムンドは古い居住の歴史をもつが、概して移動性が高いといえる。

上述の古い居住史をもつ2民族のほかに、比較的新しい時期に他地域出身の開拓者の進出がみられる。中でも重要なのは平野部に近いオガン川流域の出身者とジャワ島からの移民である。

ドゥスン・ワイティマ (Dusun Way Timah) は、1903年にオガン川流域のバトラジャ付近から来たマクルップ (Makrup) とその家族によって開かれた。1925年になっても小集落 (talang) に過ぎず、住民は5世帯を数えるのみであったが、その後コーヒー栽培が盛んになるにつれてオガン川上流地域から人口の著しい流入が始まった。ちなみにこの付近のコーヒー樹齢は古いもので50年程度という。50年前には戸数は10軒となり、小礼拝堂が建てられた。20年前には30戸、現在は約60戸が中心集落を形成している。他方1941年ごろから付近に分村が開かれるようになった。それらはタラン・トラップ (Talang Terap, 2.5キロメートル)、タラン・トゥトゥン (Talang Tutung, 3キロメートル)、タラン・サフップ (Talang Sahup, 5キロメートル) などで、現在それぞれ50, 25, 30戸の居住者がある。

最も遠いコーヒー園はワイティマの集落から16～20キロメートル離れてムアラドゥア郡 (Kecamatan Muara Dua) の領域に入り込んでいる。

オガン出身者の集落としてはほかにマルガ・ムカカウイリルとの境界近くに、1930年ごろにタラン・トラナイ (Talang Telanay) が開かれている。またマルガ・ラナウの南東部では1920年ごろからドゥスン・グノンラヤ (Dusun Gunung Raya, 1920年)、タラン・ブドンティガ (Talang Bedeng Tiga, 1940年)、タラン・ワイタニ (Talang Way Tani, 1940年) などの開拓集落がジャワ島からの来住者を主体に開かれるが、ここでもオガン系の開拓者の混入がみられる。

ワイティマの設立に少し遅れて1921年にオランダ人のコーヒー園が開かれ、ジャワ島から労働者が導入されてシパトゥフ (Sipatuhu) に居住する。シパトゥフの人口は次第に増加し、独立当時には1,300人、10年前には3,200人、1978年には3,900人程度に達した。コーヒー収穫時 (4～6月) には約600人のジャワからの季節労働者の流入がある。住民はジャワからの移住者が多いため、出身地への送金がしばしばなされ、中にはジャワに土地を買った者もある。

既に述べたように山岳部にはシパトゥフのほかに1920年以來いくつかの小集落がジャワ人やスンダ人を中心として開かれている。人口増加につれてこれらの小集落はドゥスンとしての地位を与えられつつある。たとえば1930年ごろにスンダ人によって開拓されたマルガ南東山岳部のタラン・グヌンアジ (Talang Gunung Aji) は1975年に土着のドゥスン・ピラ (Dusun Pilla) から独立して、人口744人、世帯数193 (1977年現在) の新ドゥスンを形成した。

マルガ・ラナウ地域に昔から水田があったかどうかは疑問である。たとえば土着のドゥスン・スカラミ (Dusun Sukarami) では水田

は60年前に造成されたという。現時点ではマルガ内に水田 (sabah) は2,011ヘクタール存在する。水田は原住のランボン系およびスモンド系の住民の集落には必ずあるが、主として山腹部に展開するオガンおよびジャワからの移民の集落にはほとんどない。焼畑による陸稲耕作地 (darat) はマルガ・ラナウでは1,719ヘクタールと記録されている。焼畑は通常2年間陸稲を栽培し、同時に植え付けたコーヒーの生長を待つのであって、現時点では休閑期を設けて2次林になるのを待つということはない。水田のうち4分の1 (502ヘクタール) は天水田に近いものである。以前はジャングルに放し飼いにしていた水牛や牛を集めて水田を足で踏ませて (ngaroh) 整地を行った。コーヒー園開発のため森林がなくなったので多数の水牛を放牧することができず、このような整地方法は10年以上前に姿を消して、牛にローラー (pengiling) をひかせたり人力を用いたりするようになった。現在採用

されている水稻品種は、シャム米 (180日, 収量 1.5トン/ha), Pb 5 (130日, 収量 1.3トン/ha), Pb 8 (130日, 収量 1.5トン/ha), Pb 28 (130日, 収量 1.5トン/ha) などである。高収量品種が高収量をあげることなく採用されているのは、コーヒー園での労働日数を生み出すためかもしれない。焼畑ではスタンブン (Setambun, 180日, 収量 1.5トン/ha) が採用されている。コーヒー国際価格の上昇につれてコーヒー園は急激に拡大されつつある。経営面積は1世帯あたり1/2ヘクタールから10ヘクタール程度であって、1ヘクタールあたり800キログラムないし1トンの収穫があり、1キログラムあたり800~1,100ルピアで売る。収穫期にはジャワから多数の労働者の流入があり、実りのよい場合には収穫1缶について50ルピアを現金で支払い、実りが悪い場合には雇主と労働者の間で収量を2分する (paroan)。コーヒーのほか最近では丁字 (cengkeh) の栽培が導入されつつある。

Ⅲ コムリンおよびダヤ系の諸族

1. ブンガマヤン (Bunga Mayang)

ブンガマヤンはマルタプラ (Martapura) の南西にコムリン川に沿って展開する六つのドゥスンから形成される人口11,788人 (1978年1月現在) のマルガである。最も古い集落はドゥスン・トランバワン (Dusun Tulang Bawang) とドゥスン・ヌグリラトゥ (Dusun Negeri Ratu) で、その成立に関して次のような伝説がある。西スマトラのパガルユン (Pagaruyung) に住んでいた天界から降ったスルワンワン (Selewangwang) という王女の子孫が、リワ・クルイ (Liwa-Kerui) 地方を経てスカラブラックへ移住した。彼らは4人兄弟で、それぞれの名をインドラガジャ (Indra Gajah), プルジャ (Perja), スルンバシ

(Selembasi), ギリギリ (Gili-Gili) といった。長兄インドラガジャにはスルマヤン (Selemayang) という娘がいて、ラトゥサリガディン (Ratu Sari Gading) という名のブギス人と結婚し10人の息子をもうけた。10人の息子達はコムリン川沿いに新天地を求め、メナン川 (トランバワン上流約20キロメートル、現在のドゥスン・ダマルパラ Dusun Damar Para の下) に達するとそこに小屋を建て焼畑を耕作した。そのうち彼らは現在のブンガマヤンに肥沃な土地を見出した。そこにはアブン人²⁾が先住していたので戦争をしかけ彼らを放逐し、現在のドゥスン・サバリオ (Dusun Sabah Lioh) の川下にクタビントル (Kuta Bintor) と

2) 言語起源は同系であるが、分離の時期が異なるものとみられる。

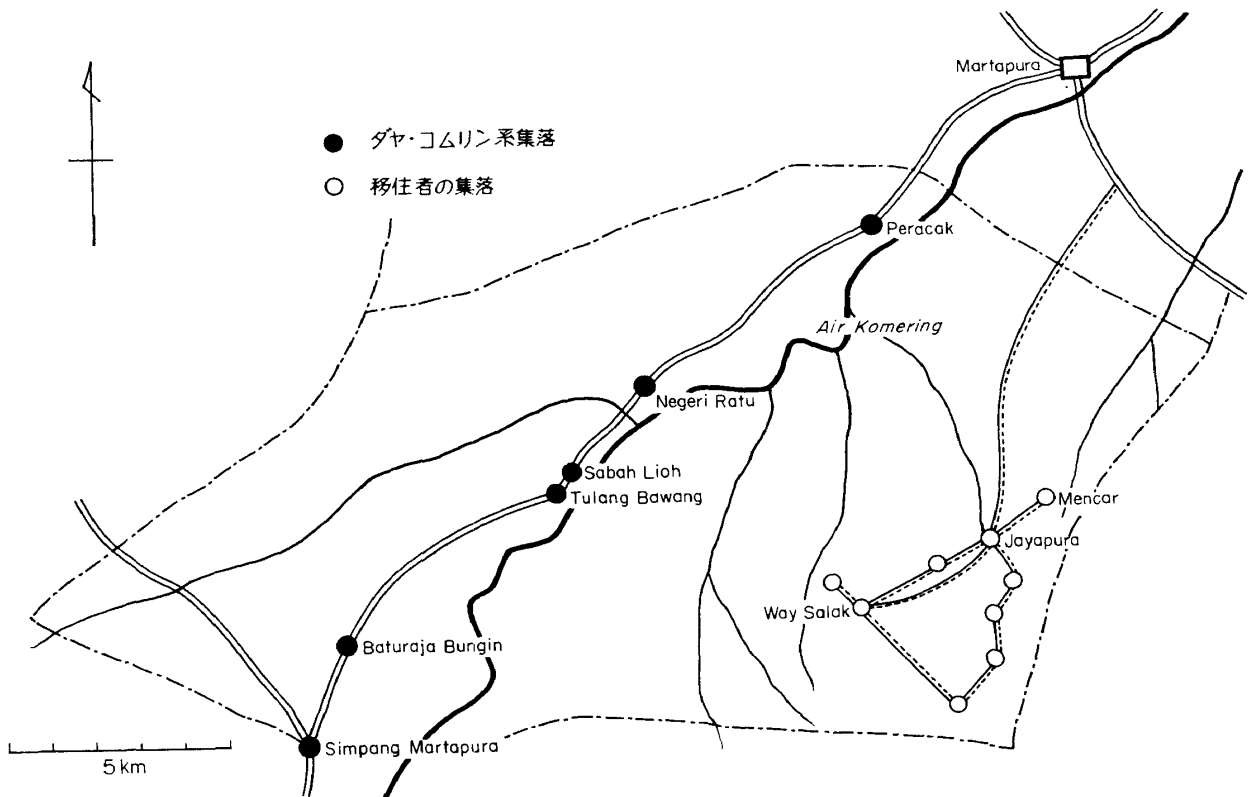


図3 マルガ・ブンガマヤンの主要集落

いう集落をつくった。10人の兄弟のうちプヤン・プムカスムヌン (Puyang Pemuka Semenu), プヤン・パモンジャガン (Puyang Pamong Jagang), プヤン・パティドマン (Puyan Pati Demang), ウンパン・サンラトゥ (Umpun Sang Ratu) およびラジャマス (Raja Mas) はのちにトランバワンを、プヤン・トゥアンジャティクラマツ (Puyang Tuan Jati Keramat), プヤン・ミナックドパティ (Puyang Minak Depati), ウンプアン・ガラカンブミ (Umpuan Ngarakan Bumi), キアイ・アラムサクティ (Ki Ayi Alam Sakti) およびウンプアン・パティスングアユン (Umpuan Pati Sengayun) はヌグリラトゥを設立した。このほかにブルジャの子孫プヤン・バティントバ (Puyang Batin Toba) はヘドゥヤン (Heduyang) という集落をつくったが、そ

の住民はのちにトランバワンとバトラジャブンギン (Baturaja Bungin) に移って廃村となった。ジャワ島のマタラム王国の認可を得た者が三つのドゥスンの首長となることになり、トランバワンのラジャマスがこの資格を勝ち取った。その後、住民の3分の2は新天地を求めて再び移動し、ランボン州バタンハリ (Batanghari) 川の支流スンカイ川 (Way Sungkai) にドゥスンをつくって住み、そこにもブンガマヤンという名が付けられたという。

ラジャマスに始まる首長は、第2代パンゲラン・ラジャプングアサン (Pangeran Raja Penguasan), 第3代パンゲラン・チュチュヌガラ (Pangeran Cucu Negara), 第4代パンゲラン・プムカチュニ (Pangeran Pemuka Cunyi) まで記憶されているが、第5代から第

30代に至るまでは知られていない。第31代はパンゲラン・ドパティ (Pangeran Depati, 称号) とだけ記録され、32代パンゲラン・ムナンディジャガット (Pangeran Menang Dijagat) 以下現在に至るまで各人の名が記録されている。現在のパッシラは1969年の選挙によってその任に就いた者で、第46代に当たるとされる。前代 (45代) のパッシラは44代パッシラの子であり、41代と42代のパッシラは親族同士であった。また35代のドパティ・ドマン (Depati Demang) の時代にオランダの統治が始まったという。

トランバワンは現在約50戸から成る集落であるが、20年前には30戸、50年前には20戸であったといわれる。100年前には10～15戸しかなかったと推測されている。この地域には1973年ごろからジャワ人が入り込むようになり、トランバワンの場合には彼らはブドンгентン (Bedeng Genteng) およびスリマクムル (Srimakmur) の小集落をつくって住み、現在その数は70世帯に達している。これらのジャワ人の小集落は行政的にはドゥスン・トランバワンの下に入る。

トランバワンでは20年前には水田は耕作されず、焼畑による陸稲耕作を行い毎年新しい土地を開いていたという。焼畑は現在も行われている。焼畑における陸稲のほかに、常畑地 (kebun) を用いて、コーヒーおよびバナナの栽培が行われてきた。水田耕作が行われるようになったのはジャワ人の影響による。ジャワ人はくわ (cangkul) を用いて天水田 (sawah tadah hujan) を耕作するが、この方法は近年原住の住民にも採用されるようになった。

外来者の来住は上述のようにドゥスン近辺にもみられるが、開拓地としてより重要なのは既存の集落から離れた未利用地である。ドゥスン・ジャヤプラ (Dusun Jayapura) はトランバワンからの小道を20キロメートル東に

歩いた位置のコムリン川支流部に開かれた新集落である。この開拓地域の草分けは、オガン川中流部のサウンナガ (Saungnaga) から来たオガン系の住民で、1945年にタラン・リングット (Talang Lingut) に入植したという。その後、他のオガン系の人々によってワイサラック (Way Salak) が開かれ、のちにこれからスラジャ (Seraja)、ガガルブキット (Gagar Bukit)、スマンカ、カンバン (Kambang) などの小集落が分出する。第3番めの集落はコムリン川のチャンパンティガ (Campang Tiga) からの開拓者によって開かれたムンチャル (Mencar) である。ジャワ系の自主移民 (transmigrasi spontan) の開拓村はずっと遅れて10年前にクトゥワイ (Ketuwai) が開かれ、次いでアスラマ (Asrama) ができ、2年前にカンキラン (Kankilan)、1年前にシドリジョ (Sidorijo) が開かれた。このような人口の増加につれて15の小集落を含むこれらの開拓村は、リングットを中心集落として1977年10月にドゥスン・ジャヤプラとして行政上の地位を与えられた。1978年1月現在の同ドゥスンの人口は2,149人である。住民の主生業はコーヒー栽培であって、小集落が分散しているため住居とコーヒー園との距離は遠くても1キロメートル程度という。米の生産は少なく、米はここでは購入されている。

2. ルンカヤップ (Lengkayap)

コムリン川上流部にはランボン系の言語の方言を話すダヤ (Daya) 系の集落が分布し、ムアラドゥアの町がその中心となっている。マルガ・ルンカヤップはムアラドゥアからしばらくコムリン川を下ったのち支谷沿いにオガン川の集水域にぬけてその支流ルンカヤップ川 (Air Lengkayap) に沿って展開する八つの集落ドゥスンより成る。最も古い集落はヌグリラトゥ (Negeri Ratu) である。各集落はその傘下に多くの仮小屋集落を有し、最も遠

い場合本村から15キロメートルも離れて焼畑を開き，陸稲，ピーナツ (kacang tanah) および他の豆類を1～3年の間栽培し，同時に植えた苗木の生育を待ってコーヒー，ゴム園などへの転換を行なっている。2，3年前から丁字が導入されている。他方，最近ではジャカルタ，パレンバンなどへの移動者も多く，マルガ・ルンカヤップ出身のジャカルタ居住者は26人を数えるという。

マルガ・ルンカヤップの祖はムアラドゥアのマルガ・トゥルンアマン (Marga Tulung Aman) に居住したウンプ・スマラクアン (Umpu Semala Kuang) である。ウンプ・スマラクアンの5人の子のひとりウンプ・スラワン (Umpu Serawang) にふたりの子があり，そのひとりススゴ (Sesungoh) でムアラドゥアの近くのマルガ・ブミアゲン (Marga Bumi Agung) の祖となり，他のひとりスサウック (Sesawuk) がルンカヤップの祖となった。すなわちスサウックから数えて6代めのラトゥジュタン (Ratu Jutan) がルンカヤップの実際の草分けとなったのである。ラトゥジュタンから数えて5代めのアリ (Ali; Pangeran Ringgoyuda Tuha) はジャワのバンテンの政府からマルガ・ルンカヤップの首長と認められたといわれ，その子バイク (Ba-ik; Pangeran Ringgoyudo Mudo) はオランダ植民地政府からパッシラとして認められたという。バイクに続いてその子タウィ (Tawi) がオランダ統治下で1878年にパッシラとなった。現在のパッシラは首長の系譜の上からは18代めに当たり，ルンカヤップに移動したラトゥジュタンから数えて12代めに当たる。パッシラのタイトルをつぐ者としては7代めである。首長の地位は原則として長男によって継承されるが，現在のパッシラの場合，父の兄の夭折のため父がその職に就き，その長男である現在のパッシラに継承されている。

3. チュンパカ (Cempaka)

チュンパカはパレンバンから道路で118キロメートル離れてコムリン川左岸に位置する人口4,612人 (1978年) の大きなドゥスンで，マルガ・スムンダワイスク II (Marga Semendawai Suku II) に属する。土地のインフォーマントによると，住民の起源はスカラブラックに求められる。西暦800年ごろパンゲラン・プカヤ (Pangeran Pukaya) に統治されていたチュンパカは，アブン人の攻撃をうけ，パンゲラン・プカヤを含む住民の多数が殺され，残った者は約10キロメートル離れたタラントング (Talang Tengah) へ逃げたという。その後チュンパカはパンゲラン・プカヤの子リガリガ (Liga-Liga) によって再興された。1400年ごろにアチェから来た³⁾ スルタン・サイドハミム (Sultan Said Hamim) が6キロメートル上流部のドゥスン・チャンパンティガ (Campang Tiga) 地域でイスラームを広め，1450年ごろにはドマックから来たサイドダルス (Said Darus) が約15キロメートル上流支流沿いのアドゥマニス (Adumanis) にとどまりチュンパカに対しても宗教的な影響を与える。1500年ごろチュンパカのパッシラ・リアパンジ (Pasirah Ria Panji) はアドゥマニスから来たルバイ・サンピアン (Lebai Sampian) にイスラームの強化を依頼した。リアパンジはルバイ・サンピアンの妹と結婚するが，彼らの間には子が生まれず，のちに第2妻を迎えてその子孫がチュンパカに住み続けることになる。

チュンパカの集落はずっと昔は現在の集落の下流部対岸の崖上にあったが，1500年ごろに現集落の下流部へと移動した。この集落に悪鬼が多く現われたため1882年に現在の場所に移った。他説にはオランダ植民地政府が住民をまとめて居住させるために移動させた

3) チレボンから来たという説もある。

いう。ドゥスン・チュンパカは現在12の区分カンボンより成り立っているが、最も古いのがカンボン6 (Kampong 6, 旧名 Kampong Tengah) であって、集落は時代とともに、上流、下流および川から離れた方向へと広がっていった。ドゥスン・チュンパカから1890年にはカンクン (Kangkung, 上流左岸12キロメートル), 1900年にウラックバル (Ulak Baru, 上流左岸8キロメートル), 1905年にグヌンジャティ (Gunung Jati, 上流左岸6キロメートル) などが分村として独立したという。他説によるとチュンパカの分村は50年ほど前にできたスカブミ (下流左岸7キロメートル) のみであって、ウラックバルは70年前, グヌンジャティは40年前にクリパン (Kuripan, チュンパカの上流左岸7キロメートル, 1700年ごろ設立) から分離独立したという。

チュンパカにおける稲作は昔は焼畑における陸稲耕作のみであった。パンゲラン・サレ (Pangeran Saleh) の時代(1800年ごろ)に盛土をしてその上にドック (duku) やドゥリアン (durian) などの果樹を植え、低い土地に水稻を植えたといわれる。1900年ごろにはこのような高みに棉が植えられたが、採算が合わず10余年で放棄された。これらの高みはその後この地域の水深が大きくなって湿地になってしまった。上述の盛土は低湿地の水深の浅い部分の利用方法の一つと考えられる。他説によるとこの マルガ における低湿地 (lebak) 利用の水稻耕作開始は1870年代といわれ、もう一つの説ではチュンパカに低湿地利用稲作が入ったのは70年前で、その技術は下流のプガガン (Pegagan) を見習ったものという。1918年にはスンガイ・パンゲラン (Sungai Pangeran) とよばれる水路が開かれてその両側の土地に水稻が植えられた。1950年にはランタイ・パンジャン (Rantai Panjang) とよばれる水路が3キロメートルにわたって開鑿され、両側の森林が伐採されて減水期稲作を

行うべく水田がつくられた。さらに1964年にはスンガイ・ピリック (Sungai Pirik) という水路が開鑿されている。水路の近くには仮小屋が建てられ、人々は老人子供を本村に残して1回につき1〜3カ月、合計して6カ月程度そこに滞在し耕作に従事する。1935年ごろ約7キロメートル離れた場所につくられた出作小屋集落カンボン・ダナウ (Kampong Danau) にはチュンパカ、スカブミ、チャンパンティガなどの住民約200世帯が仮住しており、1975年ごろ3〜4キロメートルの場所に開かれたウンブラン・ムラクサ (Umblan Meraksa) には約60世帯が住んでいる。若年者は本村に家をもたず、仮小屋に居住して資金を貯えることがある。

水田は2〜3ヘクタールもつのが理想的とされるが、最低限1ヘクタールあれば平年作で200カレン (karen, 1カレンは約10キログラム) のもみ米を得て、半分を自家消費に他の半分を売却用にあてることができる。慣習法によれば男子のみが土地の相続をうけ、兄弟の間で均分されるのが原則であるが、ときには長男だけが土地を得る。後者の場合、次男以下はマルガから土地を与えられ3年にして田になれば私有化することができる。

チュンパカでは20世紀に入ってから稲作のほかにはさまざまな作物が試みられてきた。1910年には最初のゴム園が開かれ、1929年、1960年にもゴム園がつくられた。1920年ごろには檳榔子が試みられた。1957年にはみかん (jeruk), 1973年には丁字の栽培が導入された。みかん栽培には現在ではしばしばジャワ人が雇われ果樹園に建てた仮小屋に住んで作業を行なっている。

チュンパカの人口は既に述べたように1978年現在で4,612人である。ドゥスン内の家屋数は約550であって、20年前には500戸であったという。10年前のピークを経て家屋数は以後減少にむかっているともしられる。50年前

の家屋数は200戸，100年前には30戸に過ぎなかったと伝えられる。近年ではパレンバンやジャカルタへの一時的移住 (ngerantau=merantau) が多く，チュンパカ出身者の70%が他地に居住し，30%が村にとどまっているといわれる。

4. カンクン

カンクンはチュンパカからコムリン川を約12キロメートル溯行した左岸に展開する同一マルガに所属する集落（ドゥスン）である。ここではチュンパカにおいて得られた情報を補充する意味でこの集落の成立について記録する。チュンパカに居住するこのマルガのパッシラによれば，カンクンは1890年に独立したチュンパカの分村であるというが，カンクンの住民によれば6世代前に設立されたという。他説によると，カンクンはチュンパカの首長パンゲラン・プカヤの支配下にあったという。住民の大部分はスカラブラック起源であり，4分の1弱はブギスの子孫，少数がアラブの子孫であると信じられている。彼らがどの血統をひくかは手指の形，身長，鼻の高さなどによって識別できると考えられている。

カンクンはもとは現在の集落から1.5キロメートル離れたところに位置していたが，火事で全焼して，現集落の対岸側のスンガイ・カンクン (Sungai Kangkung) とよばれるコムリン川支流沿いに新集落をつくった。1900年ごろにスンガイ・カンクンが閉塞したため人々はコムリン本流沿いの現集落に移った。1918年ごろにはカンクンから0.5キロメートル上流の右岸に家が建ち始め，1952年にはこの集落はドゥスン・スカヌグリ (Dusun Sukanegeri) として独立した。現在のカンクンの人口は3,356人，スカヌグリの人口は1,797人である。現在ドゥスン・カンクンの家の数は450戸であるが，20年前には約400戸であった。50

年前には200～250戸，100年前は100～150戸であったといわれている。

カンクンの農業は1800年以前は焼畑による陸稲耕作であって，雨期に栽培を行い耕作地を移動した。1800～1916年の間には天水田耕作が行われたという。1916年ごろからコムリン川が浅くなり始め多くの分流をつくるようになったので，水のつく土地（ルバック=lebak）が広がった。ルバックにおける水稻耕作が始められたのはこのころからである。現時点では集落に比較的近いルバック約840ヘクタールが利用されつくしたので，今後は約7ヘクタール離れた湿地林に開田する必要がある。土地不足が現われ始めているとはいえ，耕作面積の標準は水田2ヘクタール，果樹園3ヘクタール，計5ヘクタール程度と考えられている。昔の焼畑による陸稲の収量は，1ヘクタールあたり1トン，天水田の場合1～1.5トンであったが，ルバック耕作では収量が増加して2.15トンになったといわれている。

5. マルガ・ブンクラ (Marga Bengkulah)

マルガ・ブンクラはパレンバンから約100キロメートル南方にコムリン川の分流アイル・ブンクラ (Air Bengkulah) に沿って展開するコムリン族の集落から成り立っている。このあたりからコムリン川本流沿いにはマレー系諸族の居住が始まり，同一郡 (kecamatan) に属する隣接のマルガ・プガガンウルスク I (Marga Pegagan Ulu Suku I) はプガガンとよばれるマレー系住民が居住している。

村人によればマルガ・ブンクラは270年ほど前にスカラブラックを起源とする祖先によって開かれたという。これらの祖先はドゥマックからの来住者の影響で既にイスラームに帰依していた。彼らは五つの筏に分乗してコムリン川からブンクラ川に入り，そこにヌグリラトゥ（現在の Pulau Gemantung），タンジョンマス (Tanjung Mas, 現在の Tanjung

Baru), コタブディ (Kota Budi, 現在の Kota Bumi), タンジョンラガ (Tanjung Laga) およびウラックルバル (Ulak Lebar, 現在の Ulak Balam) の五つの集落 (umbul) をつくった。これらの集落はのちに10個の分村を形成して現在ではマルガ内には15のドゥスンがある。

古い集落の一つタンジョンマスはもとはより下流部に位置していたが、火事で焼失したためやや上流へ移動してティウバラック (Tiu Balak = 大きい村) という新しい名を付けた。ところがこの集落には悪鬼が出没したのでさらに上流へと移動し、そこをタンジ

ョンバル (Tanjung Baru) と名付けた。これらの小移動の時期は明らかではない。タンジョンバルには361戸の家屋があるが、20年前には200~250戸、50年前には100~150戸、100年前には30~50戸であったと住民は推定する。最近では人口増加にともないパレンバンへ移住する者も若干あるが、大部分は教育と資本の不足のため村にとどまっている。

このあたりではルバックにおける稲作が古くから行われてきたという。ルバックに水路をつくると高み (pematang) ができるのでそこで植え付けを行なった。この方法はより下流部でみられるような減水期の低湿地そのも

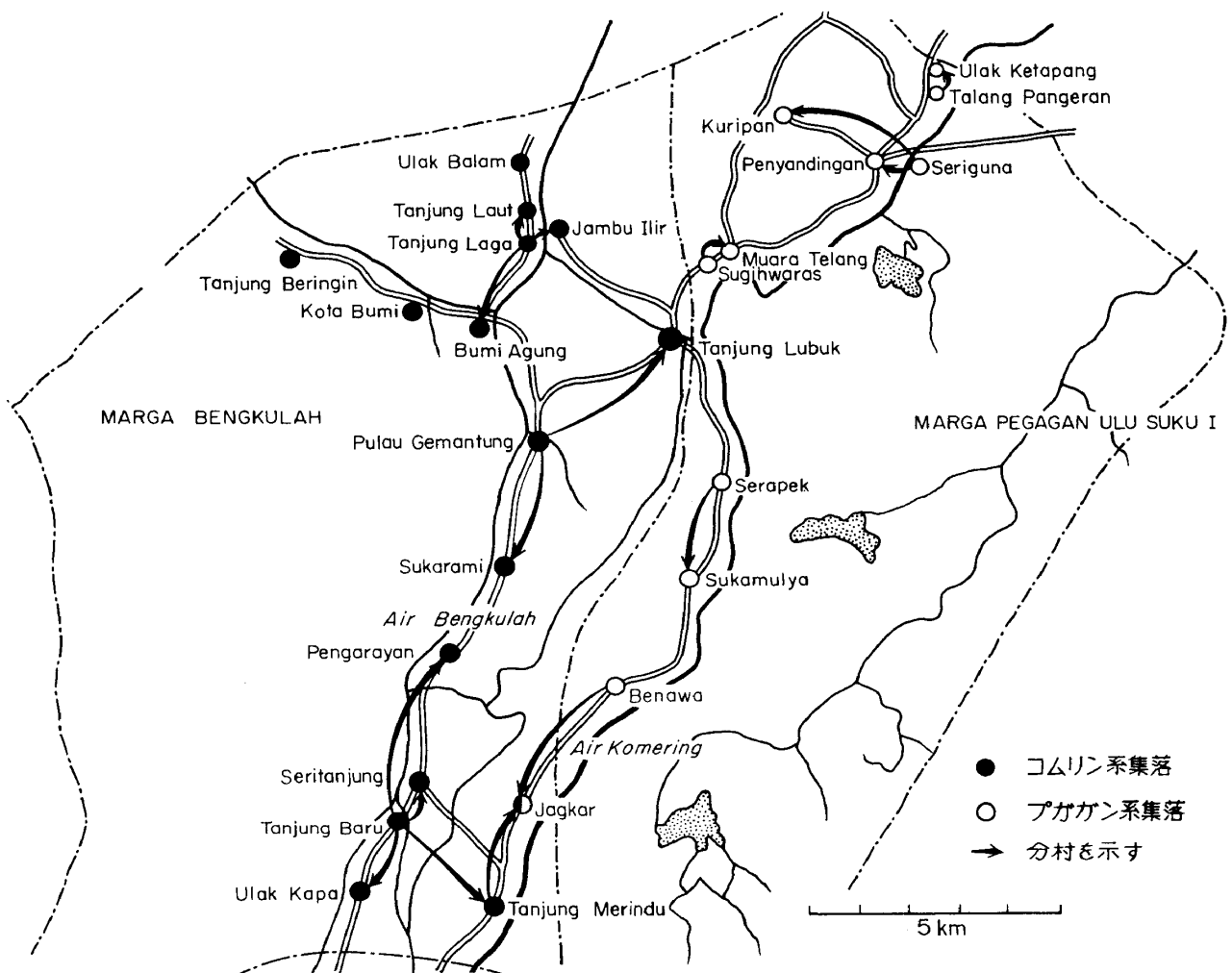


図4 マルガ・ブンクラの集落とその分村過程

のを低いままに利用する耕作方法とは少し異なっている可能性がある。ルバックのほかに畑地があって、雨期を利用して陸稲が育てられる。しかし、陸稲は10年ほど前に始められたに過ぎず、雑草が生えるため収量はルバックの3トン/haよりも10%程度低い。手を加えない湿地林 (hutan rawang) は、2～3キロメートルの位置に少々残っている。耕作面

積は1世帯当たり1～2ヘクタールは確保されているが、土地が足りなくなってきたので将来は畑地を開くことを考えている。米のほかにオランダ植民地政府の割り当てにより1918年にゴムが植えられたが、樹齢が古くなって今ではかえりみる者もない。50年前には多くの者が檳榔子を植えたが、これらは次第に果樹に取って代わられた。

IV コムリン川およびオガン川下流域の諸族

1. カユアグン (Kayu Agung)

カユアグンはパレンバン下流のブラジュからコムリン川を約70キロメートルさかのぼった地点の一つのマルガで、道路沿いにはパレンバンから40キロメートルの場所にある。住民の大部分はアブン系で一つのドゥスンのみコムリン系の祖先をもつ。ランポン州に展開したアブン人と南スマトラ州に発展したコムリン人の二つのランポン系民族がこの地点で出会うのである。

アブン系諸集落の祖先はランポン州のブンガマヤン (Bunga Mayang) 出身のムコドゥムムタルアラム (Mekodum Mutar Alam) で、彼はコムリン川沿いに居住地を求めようとしたが、戦いに破れてマチャック川 (Sungai Macak) を経てコムリン川の支流ルンプイン川 (Sungai Lumpuing) 流域に達しそこに村を開いた。その曾孫スティアラジャディヤ (Setia Raja Diyah) の時代にこれまでの集落コタパンダン (Kota Pandan) のほかにブルマワ (Buluh Mawa) という集落が開かれ、その繁栄につれてスティアラジャディヤ自身もそこへ居を移した。彼の娘ハンダックブウェック姫 (Puteri Handak Buwek=白髪姫) は、ラトゥアジ (Ratu Aji) から来たスクミルン (Suku Milung) 神の化身と伝えられるジャランアンカタン (Jarang Angkatan) と

結婚し、ジャランアンカタンが次代の首長となった。他方、スティアラジャディヤの弟スティアタンディン (Setia Tanding) はプマタンビダラ (Pematang Bidara) に集落を開き、その子スティアクジャン (Setia Kujang) はコタブシ (Kota Busi) とよばれる集落をつくった。その孫スティアランダイ (Setia Landai) の時代にこの地方全域に大水があったので、スティアランダイは一族をひきいて現在のドゥスン・プダマラン (Dusun Pedamaran) の上流部に居を移してそこをプリギ (Perigi) と名付けた。兄スティアラジャディヤの家系では同時代の首長はブンクック (Bungkuk) であったが、彼の村はムスジ (Mesuji) のバタンハリに移ってタンジョンブンギン (Tanjung Bungin) と名付けられた。その子プニャブミムダ (Punya Bumi Muda) の時代に人々はタンジョンブンギンからプリギへと合流した。スティアランダイの子ジャナ (Jana) はさらに新村を開いてコムリン本流沿いに現在のプリギ (同名) を設立した。そのころコムリン川のより下流部キジャン (Kijang) のバトゥハンバル (Batu Hampar) に居住していたトゥアン・プガドゥ (Tuan Pegaduh) の一族が、彼の娘ダヤンスカラ姫 (Puteri Dayang Sekara) とジャナの子スラパティ (Surapati) との通婚を機にプリギの近くに移住し、カユアグンの集落をつくった。トゥアン・

プガドゥの家系は曾祖父ラジャ・ジュングット (Raja Junggut) からの名前が伝えられており、ラジャ・ジュングットの時代には既にバトゥハンパルに居住していたという。彼らはスカブラック起源のコムリン族の一派と考えられる。コムリン河岸に設立された二つのドゥスンが良い場所を占めているのを知って、ブンクックの息子プニャブミムダは新プリギの南(上流部)にコタラジャ (Kota Raja) を開いた。他の息子プルブジャヤ (Perbujaya) はカユアグンの対岸にスカダナ (Sukadana) を開いた。コタラジャからはジュアジュア (Jua-Jua) が分岐する。また、前述のジャナの息子スラパティの下に、クダトン (Kedaton), パク (Paku), ムンゲンジャヤ (Mengunjaya), シダクルサ (Sidakersa) の各ドゥスンが創立された。

上述の九つのドゥスンはそれぞれの首長をもち、彼らはドパティ (depati) という称号でよばれた。このような状態にあったこれらの村落群をさして、人々はモルゲ・シウェ (Mor-ge Siwe) すなわち「九つのマルガ」とよんだ。このことは各集落の独立性がかなり高く、今日のマルガに相当する統一的政治組織はなく、現在よりもずっと小規模のドゥスンがそのまま一つのマルガと考えられていたことを示している。パレンバン大侯 (Sunan Palembang) はこの地域の様子を知って支配下に加え、スカダナの首長ラジャ・イクタンムダ (Raja Ikutan Muda) をこの村落群全体の首長に任じた。ラジャ・イクタンムダの後継者は甥のマハムッド (Machmud) で、マハムッドはその子ジュアジュアの住人クマライングラ (Kemala Inggra) によって継承される。クマライングラはオランダ植民地政府によって任命された最初のパッシラとなり、1830年から1864年までその任にあった。1864年以降現在に至るまでパッシラの地位は12人の人物によって占められたが、在職期間の最長は40年、

最短は5カ月であった。

カユアグン地域の九つのドゥスンは、その後19世紀のオランダ統治時代に開かれたドゥスン・チンタラジャ (Dusun Cinta Raja) を加え、さらにマルガの行政範域にマレー系住民より成るチュリカ (Celikah) およびキジャンウル (Kijang Ulu) の二つのドゥスンを含むようになった。調査時点におけるマルガの総人口は20,649人である。もとの居住地域であったルンブインはこのうち6,059人の人口を擁し、七つのドゥスンが展開する。この地域には焼畑陸稲耕作と漁業を生業としたブチュパック (Becupak) やセイサランガウ (Sei Sarangau) など各々7～8戸から成る小集落もあったが、これらは3年ほど前に廃村となり、住民は上記の7集落の一つトビンスルク (Tebing Suluk) へ移った。アブン系の住民の祖先が居住したと伝えられるルンブイン川上流域には、約7年前からブリトゥン (Belitung) 地方からジャワ人が移り住むようになり、四つの集落を形成し7,433人の人口を有している。さらに上流部は隣接するムスジの一部とともに政府の外島移民計画地域となり、ユニットVからユニットVIIがこのマルガ内に設定されて、6,309人の人口を数える。

上述の集落発展史は、元来この地方では集落の移動がよく行われたことを示している。移動時代の農業は焼畑による陸稲耕作であったと考えられるが、現在カユアグン地域の農業は圧倒的にルバックを利用した減水期稲耕作である。コムリン川沿いのプリギに集落が開かれたのは1800年以前であることは間違いないが、スカダナの初代首長プルブジャヤとラジャ・イクタンムダとの間の世代数が必ずしも明確ではないのでより正確な時期の推定が不可能である。住民の話ではこの地域のルバック耕作の歴史は古いといわれるが、後述のシラプラウパダン (Sirahpulaupadang) の例から推測すると、移住直後に減水期稲作を

始めたと考えるよりは，ある程度あとになって開始したと考える方が妥当性が高い。いずれにしても，ルンプインの移動時代にコムリン本流沿いの定住時代が続き，後者はほどなくルバックの利用をとまなうようになったのである。

2. シラプラウパダン

シラプラウパダンはパレンバン下流の合流点プラジュからコムリン川を約50キロメートルさかのぼったところに位置するマルガで，16のドゥスンから成り立ち人口は29,708人（1978年7月現在）である。マルガと同名のシラプラウパダンとよばれるドゥスンが最も古く成立したと伝えられ，1668年にジュマヘ

ル・ビン・シノンガン（Jemaher bim Sinongan）がマレー人地域から家族とともに来住したのがそのおこりである。16個のドゥスンの成立順序はほぼ明らかであるが，親村・分村の関係は分らない。5番めに成立したといわれるスカラジャ（Sukaraja, 旧名 Ulak Kedondong）を除けば，初期に成立したシラプラウパダン，ランタイ（Rantai），トルサンムナン（Terusanmenang），スルダンムナン（Serdangmenang），トラテ（Terate）などの集落は分流パダン川（Air Padang）の分岐点からコムリン川本流に沿って上流部へ5キロメートルくらいの間に分布し，次に成立したといわれるマングンジャヤ（Mangunjaya）とウラックジュールムン（Ulakjermun）とがさらに

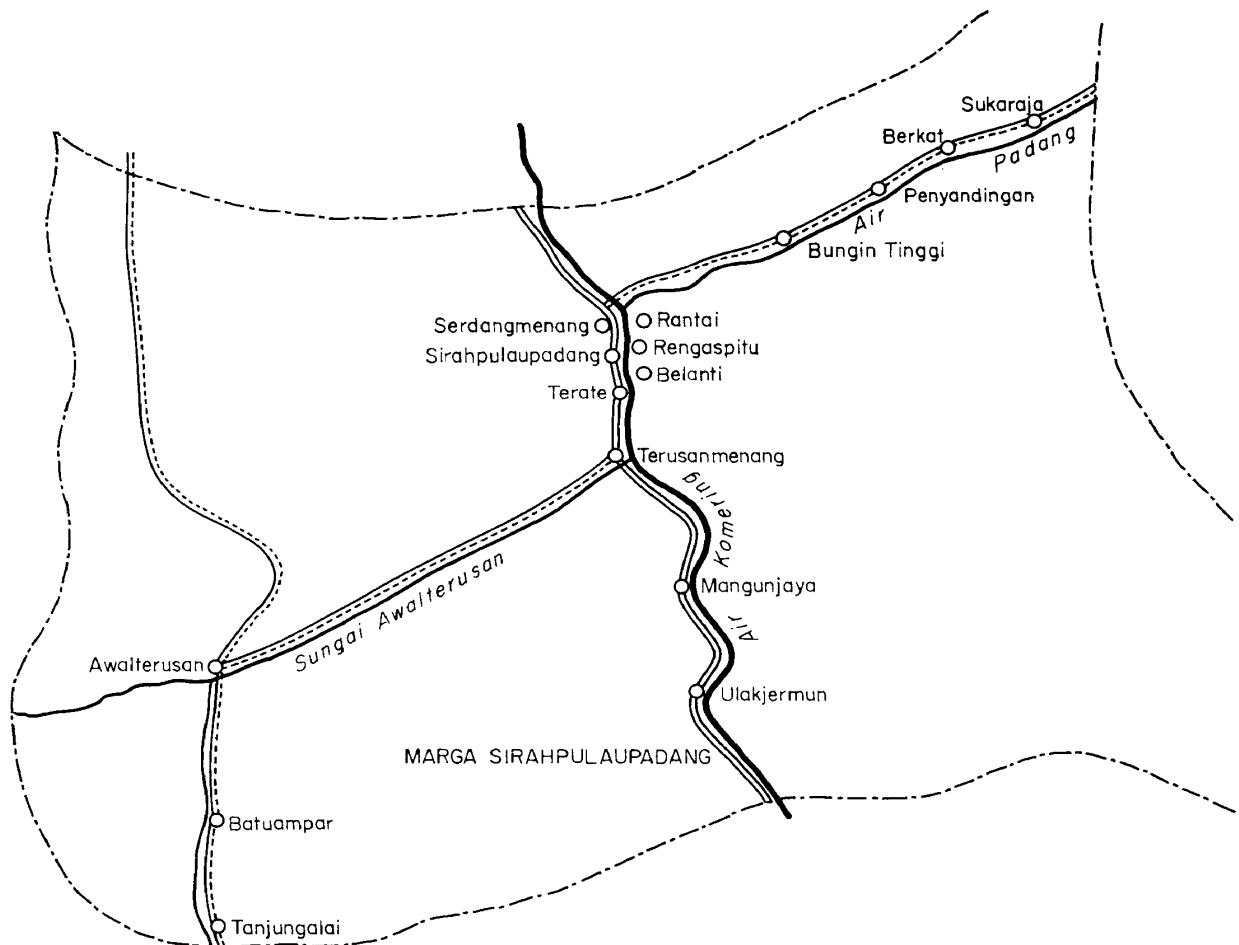


図5 マルガ・シラプラウパダンの集落

上流部の左岸を占め、その次に成立したルンガスピトゥ (Rengaspitu) とブランティ (Belanti) とは右岸のランタイとトルサンムナンとの間に並ぶ。ブンギンティンギ (Bungin Tinggi), プニャンディンガン (Penyandingan), ブルカット (Berkat) などのドゥスンはさらにのちの時期に分流に沿ってスカラジャに至るまでの地域に開かれた。最も新しい時期にコムリン川とオガン川を結ぶ運河スンガイ・アワルトルサン (Sungai Awalterusan) の中間地点に、アワルトルサン (Awalterusan), タンジョンアライ (Tanjungalai), バトゥアンパル (Batuampar) の三つのドゥスンが形成された。このうち最も新しいバトゥアンパルは1918年にオガン川下流のマレー系住民が入植したものである。古い時期にはマルガ・シラプラウパダンの領域は現在よりも広く、南接するマルガ・トロコ (Marga Teloko) が100年ほど前に分離、前述のスカラジャの西にパダン川沿いに展開するウラッククマン (Ulak Keman) などのドゥスンは1918年に分離してマルガ・クマン (Marga Keman) を形成、またタンジョンアライの南に位置するキジャンウル (Kijang Ulu) は1922年に分離してマルガ・カユアグンに編入されたという。マルガ・シラプラウパダンはジュマヘルを最初の首長として、現在のパッシラは17代めに相当する。このうち5代め以下の首長の名前は記録されているが、2代めから4代めに至る3人の名前は記憶されていない。歴代のパッシラはすべてドゥスン・シラプラウパダンまたは隣接するトラテの出身である。

マルガ・シラプラウパダンの人口は、インドネシア独立時には現在の約半分の14,000人くらいであったといわれ、それ以前はさらに少なかったものと考えられる。少人口時代の農業はいわゆる焼畑農業あるいはそれに近いものであったらしい。当時の稲作地をサワタラン (sawah talang), サワトゥガラ (sawah tugalan), サワプマタン (sawah pe-

matang) などとよぶ。サワ (sawah) はインドネシアでは通常灌漑田の意に用いられるのに対して、タラン (talang) はこの地域では焼畑、または新開地の仮小屋集落の意、プマタン (pematang) は低湿地内の小高くなった土地の意、トゥガラ (tugalan) は穴あけ棒を用いて種籾を播く意に使われ、いずれも水田よりも陸田を連想させる語である。サワという単語はここでは借用語としてその原意を変じて稲を植える場所の意に使われているに過ぎない。この時代の耕作地は集落から200メートル以内に立地し、3年間の耕作後3年間の休耕期間をおいたという。1920年以後になると土地不足のため、雨期には深所で水深2.5メートルにも達するルバックを、減水状況に応じて乾期に利用する農法を採用するようになった。最初にルバックを利用するようになったのはドゥスン・シラプラウパダンで1920年にルバック・シラプラウパダンを開き、ドゥスン・トラテがこれに次いでルバック・トラテを開いた。スカラジャおよびブランティでは土地が十分あったため、低湿地の利用を始めたのはそれぞれ1960年、1962年になってからである。ルバックと集落との距離は200メートルから4キロメートルで、通常出作小屋を設けて耕作を行う。現在マルガ内には未利用地が北東、北西、および南西の隅に残っているが、北東のものは水が深過ぎるため、北西では病害発生のため、南西のものは酸性土壌のため耕地として不適であるといわれる。

3. プガガンイリル (Pegagan Ilir)

オガン川はパレンバン市に合流点をもつムシ川の支流で、コムリン川とはほぼ並行して平野を流れ、両川間の距離は最短部では5キロメートルくらいになる。パレンバンから道路沿いに30キロメートル余、オガン川沿いに45キロメートルくらいの地点に、プガガン (Pegagan) とよばれるマレー語系の人々がプガ

ガンイリルスク I, II, III (Pegagan Ilir Suku I, II, III) の三つのマルガを形成している。彼らの祖先はムシ川中流部の町スカユの (Sekayu) 対岸スンガイ・クルック (Sungai Keruk) から来たという。スンガイ・クルックに住んでいたブルンジャウ (Burung Jauh) に、スラヘルタ (Suraherta), スラカルティ (Surakarti), およびジャヤカルティ (Jaya-karti) の3人の息子があったが、スラヘルタがパッシラのジェナン (Jenang) を殺害したため、3人は現在のプガガンイリルスク I 内のタラン・クティ (Talang Kuti) に移った。スラヘルタはプガガンイリルスク I の祖となり、ジャヤカルティはプガガンイリルスク II の祖となった。スラカルティがどうなったかは知られていない。スク I の最初のパッシラはシムン (Simun) であり、現在のパッシラは9代めに当たるといふ。

プガガンイリルスク I に含まれるドゥスンのうち、タンジョンアグン (Tanjung Agung) は起源を異にしている。すなわち、ふたりの者がオランダ植民地政府に命じられてタンジョンルブック (Tanjung Lubok) およびタンジョンセネ (Tanjung Sene) の集落を開いた。後者は大蛇の出現のためのちにタンジョンサゴ (Tanjung Sago) に移動した。これら二つの集落が1890年にこのマルガに編入されて現在のタンジョンアグンとなった。スク I は1970年に五つのドゥスンを分離して、マルガ・プガガンイリルスク III (Marge Pegagam Ilir Suku III) を新設することになる。

これらのマルガにおける農業はルバックを利用した減水期稲耕作である。この技術は彼らのもとの居住地であるムシ川流域において行われているものと同じで、そこからもたらされたと信じられている。これらのマルガにおいては急激な人口増加によって土地不足が現われている。スク I でもスク II でももはや開発されるべき低湿地は存在しない。ルバック

ク耕作からは1ヘクタール当たり約3トンの柄付きもみの収穫があり、1世帯1ヘクタールをもつことが望ましいといわれるが、スク I では平均所有面積は1/6ヘクタール程度になっているといわれる。スク II では40%の住民が所有地をもたない。土地不足を背景に近年では下流部への開拓者としての移動が目立つようになった。40キロメートルほど離れたムアラクアン (Muara Kuang) はそうした開拓地の一つで、人々はそこでもルバックを開いて耕作を行なっている。

4. マルガ・サカティガ (Marga Sakatiga)

マルガ・サカティガはマルガ・プガガンイリルスク I のすぐ下流部のオガン川沿いの集落サカティガ (Sakatiga), インドララヤ (Indralaya) などを中心とするマルガである。住民の起源は、ゲルンバン (Gelumbang) から来たブリダ (Belidah), ムランジャット (Meranjat) からのプナサック (Penasak), および古い時代に来たジャワ人などの混合である。パレンバン大侯の時代からこれらの地域に兵隊がおくられてきて耕作に従事したともいう。主な農業形態は伝統的にルバックにおける減水期稲作であった。現在の1世帯当たりの土地所有は1/2ヘクタール程度である。湿地 (rawa-rawa) は集落から離れた場所にはまだたくさん残っている。マルガ内には畑地が相当にあるが、これらはプガガンイリルスク I, スク III の住民やジャワ人によって開拓されたもので、キャッサバや丁字などが植えられている。

5. マルガ・プムルタン (Marga Pemulutan)

マルガ・プムルタンはパレンバンからオガン川を約15キロメートルさかのぼった位置にあって、マレー系住民が住み、パレンバン語に近い言葉を話している。パレンバン王国時

代からパレンバン人が住みついているといわれる。マルガの面積は約40,000ヘクタールであるが、ここに51,800人(9,100世帯)が居住している。32,000ヘクタールが減水期作水田(sawah lebak)として既に開かれている。低地に位置するためルバックは伝統的に耕作されており、畑地は昔からなかったという。10年前の人口は48,000人、第2次大戦中(1942～1945年ごろ)の人口は30,000人程度であった。湿地林は日本軍政時代(1942年ごろ)に開拓されて姿を消した。これが土地不足の始まりとみられる。1世帯にとって十分な耕

作面積は2ヘクタールで、1ヘクタール当たり2.5～3.0トンのもみ米収穫を得る。実際には1.5～2ヘクタールを所有する者も多いが、土地のない者もある。ムシ川下流部のチンタマニス(Cinta Manis)、ウパン(U pang)、ムシプヌグアン(Musi Penuguan)などに開拓地を求めて仮小屋で生活し、収穫後帰村する者もある。さらに遠くパニユアシンII(Banyuasin II)にまで土地を求め、パサンスルット(pasang surut=潮汐灌漑)により耕作を行なっている者もある。

V ムシ川下流部の集落

1. チンタマニス

チンタマニス(旧名はCinta Mani)はパレンバンからムシ川を約20キロメートル下った分流スンガイ・クンバン(Sungai Kumbang)の分岐点近くに位置するドゥスンで、同分流のより下流部のプランバハン(Puranbahan)、トルックトルギリック(Teluk Tergirik)、スブブス(Sebubus)とともにマルガ・クンバン(Marga Kumbang)の旧村部分を形成する。チンタマニスの集落をつくったのは、5世代前にオランダ軍のパレンバン侵攻を避けて同市から逃げ出した市内のサトゥイリル(Satu Ilir)地区の居住者である。来住期は19世紀初頭と推測される。1961年には政府の外島移民計画に沿って、集落東方にむかって水路が完成、約1,250世帯、8,250人のジャワ人が入植した。

チンタマニスの人口は1978年現在152世帯800人であるが、1967年には127世帯626人であった。20年前には約100世帯、50年前には60世帯、100年前には25世帯程度であったと考えられている。昔の農法は陸稲耕作(peladangan)であったというが、それは木を伐っ

て焼き、稲苗の2回移植を行うもので、河岸部を利用したパサンスルットをとまなうものであった。このドゥスンでルバックを利用した減水期稲作が始められたのは40年前のことで、上流のオガンコムリンイリル県の方法を模倣したという。このマルガの中では最上流部のチンタマニスでこの方法が最初にとり入れられ、下流のトルックトルギリックに及んでいったが、最下流のスブブスでは乾期に汽水が入るため減水期稲耕作はとり入れることができなかった。現在ではこの耕作法をとり入れたドゥスンにおいては、ルバックにおける稲作面積の方がパサンスルットによる稲作面積よりも大きいという。稲作面積は1戸当たり2ヘクタール程度であるが、土地所有は1戸当たり4～20ヘクタールに達し、土地はまだたくさんあると意識されている。

2. スバリック(Sebalik)

スバリックはパレンバン下流約55キロメートルのムシ川の分流スンガイ・スラットジャン(Sungai Selatjalan)に面した世帯数173、人口737人(1978年)のドゥスンで、マルガ・ガシン(Marga Gasing)に属する。この集落

はチンタマニスと同様，パレンバンに対するオランダの侵攻にともない同地から逃げ出した人々によってつくられた。昔はスバリックのほかにブリアンパディ (Bulian Padi) という集落があったが，後者の半数は植民地時代にパレンバンに戻り，他の半数はスバリックに来て集落が消滅した。マルガ・ガシンは八つのドゥスンから成るが，パレンバン出身者のドゥスンはスバリックのみで，他はバンカ (Banka)，ムランジュット (Meranjut)，ジャワなど異なった起源をもつ。この意味でこのマルガは行政単位としての性格が強く，伝統的な政治的統一体としての性格はドゥスンの方に強くみられる。

スバリックにおける稲作は伝統的には焼畑によるもので，土地を焼いてから2，3年間耕作し，5年間放置し，その後再びもとの場所に戻ったという。耕作は1月ごろに播種を開始し2回移植後乾期の8月に収穫するという農事暦に従っていたが，4年前から作季と品種を変えて，8～10月に苗代をつくり2回移植後5月に収穫するという方法を採用するようになった。後者の方法はムアラトラン (Muara Telang) の稲作から学んだというが，ムアラトランの住民はこの方法をさらに2年前にブギスからとり入れたという。以前の農事暦による稲作はラダン (ladang＝焼畑陸稲) として，現在の方法はパサンスルットとして区別されている。スバリック川の支流クントン (Kenten) 川に入り込んでスバリックから25キロメートルほど離れた低い丘陵地域に立地するクントンでは長い穴あけ棒を用いて直播する方法がとられており，ここに丘陵地の焼畑と低湿地の焼畑の方法の相違がみられる。

スバリックは元来小集落であったものが急激に増大しつつあり，20年前には48世帯，10年前には60世帯といわれた戸数が，既述のように現在では173世帯になっている。1世帯当たりの耕作面積は1½ヘクタール程度で，

最も遠い耕地はマルガ内に存在するが，15キロメートルほど離れており小舟で1時間半ほどかかるという。

3. パリットスコマジュ (Parit Sukomaju)

パリットスコマジュはムシ川の分流スンガイ・スラットジャランに沿ってパレンバンから約80キロメートル下ったドゥスン・カラニアニャル (Dusun Karang Anyar) の住民の開拓地で，同集落の約1キロメートル上流に位置している。ドゥスン・カラニアニャルはマルガ・ムアラトラン (Marga Muara Telang) に属する。このマルガはパレンバン語に近い言葉を話すマレー系の住民を主体とする五つのドゥスンから構成され，2,619世帯，13,096人の人口をもつ。パッシラは12代めと伝えられ，現在のパッシラは既に10年間その任にあり，祖父の42年間，父親の27年間のあとをひきついだものである。このマルガからは12,316ヘクタールの土地を外島移民計画のために提供し，既に750世帯が入植している。またマルガ内の地域にはパサンスルットにより稲作を行うブギス人の到来が多くなっている。

パリットスコマジュではブギスの耕作方法を模倣して川に直角に溝 (parit) を掘り，潮汐により水を得て水稻を耕作する方法が試みられている。3キロメートルまで溝を掘る許可を得て，2本の溝が掘られて150ヘクタールが開かれた。この計画には35世帯が参加して，調査時点では一つの溝に13世帯他の溝に2世帯が仮小屋を建てて住んでいた。1世帯当たり3ヘクタール程度を耕作している。これらの開墾者達は本村には耕地をもたず，農業労働やココヤシ栽培などによって生計をたてていた。彼らの伝統的な耕作法は2回の移植と休閑期をとまなうパサンスルットであったが，現在ではこの移動的な耕作方法を保持する意図はないという。

4. ブギス人の集落

ムシ川下流部にブギス人の移住が始まったのは約12年前である。彼らはセレベスのボネ、ワジョなどの出身であるが、これらの居住地から直接ムシ川へ来た訳ではなく、リアウなどにかんがりの間滞在したあと来住した者が多い。セレベスからリアウへの移住は、たとえばクアラエノック (Kuala Enok) 地方に関しては1920年代から行われていたが、1950年代のダルルイスラーム (Darul Islam) の反乱にまき込まれることを避けるため、前住者を頼ってさらにセレベスからの移住者が増加した。

ムシ川下流部で最も古いブギス集落は、パリットプラジェン (Parit Perajen) である。この集落の創設者アミヌディン (Aminudin, 42才) は1951年にボネの同村の朋友14人とともに30トンの船を借りてクアラエノックのインドラギリ (Indra Giri) に移住し、2年後に妻や親族をよび寄せた。インドラギリで16年を過ごしたのち、アミヌディンは4人の仲間と5トンの小舟でこの地へやって来てパッシラの許可を得て開拓を始めた。1年後に家族が加わって集落の人口は4人の女を含んで15人となった。1973～1974年には多くの者が来住し、現在約150世帯がその集落に居住している。

ブギスがここで採用している稲作技術は、彼らが前住地クアラエノックで学び取ったものである。湿地林を伐採して焼き、1メートル幅くらいの溝を掘って潮が満ちてくると水が入るようにしてこの土地で稲を育てる。特徴は小溝によって満潮時に河水を導入することで、この方法がムシ川下流域でブギス流のパサンスルットとして認められている。使用品種はクアラエノックからたずさえたクトゥックペンデック (Ketek Pendek) およびクトゥックティンギ (Ketek Tinggi) が主力を形成する。耕地には小屋を建て、農繁期にはそ

こに寝泊りすることもある。ブギス人が行う方法はリアウ人の農法に比して若干の相違がある。すなわちリアウ人は3年ほど連作したのちに休閑期をおくが、ブギスの場合には土地が不足しているせいもあって移動を行わず、雑草が生えても一生懸命とるという。マレー系の民族は雑草が増えると土地自体が悪くなると考えるが、ブギスはそのようには考えない。ただし稲作を行なった土地をココヤシ園に転化することはリアウにいたときからブギスによってしばしば行われてきたという。

5. その他の下流部居住者

ムシ川下流部の本流および分流には上記諸族の集落のほかいくつか異なった居住の様相がみられるので、それらについて簡単に記述しておこう。まずパレンバンから約85キロメートル離れた河口部にはスンサン (Sungsang) とよばれる集落がある。住民はジャワから来たという伝説もある。少なくとも1700年に最初の首長が任命されたというが、比較的新しい時期にパレンバン、ジャワ、ルマタン (Lematang)、オガン川やコムリン川方面から来た者も多い。言葉はジャワ語の影響を受けているが、パレンバン語に近い。10年前の人口は約15,000であったが現在では約25,000人が居住する。住民の主要生業は漁業で、農業はほとんど行われぬ。スンサンの集落自体はニボン材の歩道で互いに結ばれた密集した杭上家屋群から成り立ち通商基地として機能している。

下流部は政府による大がかりな外島移民の行われている地域でもあり、既に示したいくつかの移民計画地のほかに、ウパン (Upang) の下流部には2,086世帯、9,040人を擁する大開拓地域がある。

ムシ川分流スラットジャラン川の分岐点近くや本流のよりパレンバン寄りには上流部の居住者が個別に開拓を試みているケースがみ

られる。最も目立つのはオガン系の開拓者である。たとえばプムルタン (Pemulutan) から来た47才の男は、25キロメートル下ってスラットジャランに入り、ドゥスン・ガシンの長の許可を得て3年前に5人の男を雇って川沿いに約4ヘクタールの耕地を開き、パサンスロットによって稲作を行なっている。自身の村にも4ヘクタール以上のルバック水田を有するが、その半分は小作に出し他の半分は人を雇って耕作している。このあたりには約40世

帯のオガン系の人が入植を試みているという。パレンバンにより近いムシ川沿いにはパレンバン 北方約10キロメートルの集落 クンタン (Kentan) の分村スリナンティ (Sri Nanti) がある。この集落から川沿いに3キロメートル離れてクンタン本村からの開拓者の小屋がみられる。彼らは6年前に開拓を始め、現在では5世帯が小集落をつくって20ヘクタールを耕作している。

VI 系譜と人口

1. 祖先の深さ

既に示したように、ランボン系、マレー系を問わず南スマトラ州の集落はその起源に関する口碑をもつ場合が多く、ときにはひとりの祖先が集落成員の共通の祖として認められている。人口増殖の結果は原則として派生村分立をともなった。このような開村のあり方は、(i)集落が概して小規模であったこと、(ii)人口が内発的に徐々に大きくなっていったことの二つの様相を含んでいる。これらの点は短期間に大規模な開拓が行われたタイ国のチャオプラヤデルタやマレーシアのケダー平野などと異なっている。コミュニティ所属意識の強さはこのような部族的あるいは村落国家的ともいい得る状況と強く結び付いている。

既に具体的に示したように、多くの集落は草分けとなった人物の名とその子孫の系譜を保持している。集落成立の経緯が単なる伝説で終らず、実際の家系と結び付いていることが重要である。首長の地位は長男によって継承されることが多いので、これらの家系をあと付けることによって集落成立年代に関するある程度のイメージを得ることができる。しかしながら、村人がこれらの系譜から話を進める場合には大抵年代に関する過大評価が行

われるようにみえる。チンタマニスでは村人は1世代を50年と数え、5世代前にさかのぼるという村の起源を250年前とする。カンクンでは6代にわたる期間を約350年という。ジュパラでは首長が15代めであるが1世代を40年と考えて600年という。長男による地位継承と男子における早婚(18才程度)を考慮すると、世代交替は長い場合でも25年以下と考えられ、仮に40～50年首長の地位にとどまった者があるとしてもこの値を平均として扱う訳にはいかない。

世代に限らず年代を述べる際にも同様の過大評価が行われている可能性がある。チュンパカが8世紀に開かれたとか、カユアグンでアブン系とコムリン系の出会いと通婚が1400年代に行われたなどというときにはその信憑性が疑われねばならない。同様の理由で「100年前」は彼らにとってはきわめて遠い過去としか知覚されず、100年前に関する情報は既にあやふやになっている場合がある。チュンパカとカンクンの現在の戸数はそれぞれ550戸、450戸であるが、100年前にはチュンパカは30戸、カンクンは100～150戸であったとそれぞれの村から報告されている。いずれの場合もその信憑性は疑われねばならないが、とくにチュンパカの場合その過小評価が目立つように思われる。しかし、この過小評価の背

景には昔は小集落が多かったという考えが貫かれているのである。

多くの集落がそれぞれの草分けの系譜を有することに着目すると、祖先間の関係を明確にすることによってすべての集落間の系譜関係を明らかにすることの可能性が考えられる。しかしながら、実際にはこの作業はきわめて困難である。それは同一人が違う名で伝えられた可能性があることや、分村の草分けは本村においては低位者であった場合があり、本村におけるつながりが見出せないことなどのためである。過去へのつながりは村人からは強く求められてはいるが、所詮過去への糸はどこかで切れていることが多いのである。

2. 住民の系譜にみる人口増加

ランボン系の集落や脊梁山脈中のマレー系諸族の間では、小さな集落では全成員に関して、大きな集落ではその1区分の住民に関して、創設者から始まる系図を保有することがある。ランボン系諸族が父系傾斜をもち、脊梁山脈中のマレー系諸族が母系傾斜を示すことを考慮すると父系・母系の差は系譜作成に必ずしも関係しないといえる。実際父系の場合でも女子の名の一部が、母系の場合でもほとんどの男子が系図内に記入されている例がある。

集落への帰属意識はきわめて強く、ジャカルタやパレンバンなどの都会に職を求めて移住する者があってもその存在は村人から忘れられることはない。ジャカルタにおいて同郷会が形成されその名簿が村に届いている例もある。都市居住者は折ある毎に出身村の親族をたずねようとする態度を失わず、在村者の側では親族の寄り集まる機会に備えてできるだけ大きな家を構えることが理想とされている。伝えられた系図は祖先を志向するばかりでなく、末広がりになっている子孫の名を記録し、集落出身者にその位置付けを与える役割をも果たしている。

上述のような系図は人口研究に利用される性格を有している。既に述べた諸集落のうち、チュンパカとルンカヤップにおいてこの種の系図が入手できた。後者はパッシラの家系に限られ記載人員数が少なく、また性別に関して不明瞭なところがあるので、この分析は上述の地域外の脊梁山脈部から得られた他の二つの系図とともにのちの機会に行うことにして、ここでは前者の例をやや詳しく紹介しよう。系図はチュンパカの1区域カンボン・スラウィ (Kampong Selawi) 出身者に関して1937年から1957年の間にまとめられたものである。カンボン・スラウィの共通の祖先はカイ・アンダンガ (Kai Andangah) とよばれる人物で、作成当時最ものちの世代に属したのは第17代であった。カイ・アンダンガから第8代のパティ・サンスラニャワ (Patih Sangserah Njawa) までは各代1名ずつが記されているのみで、系譜が末広がりになるに克明に記されているのは第9代以下である。第8代を共通の祖先として第17代に至る10世代が、カンボン・スラウィの実際の展開期に生存していたということができよう。これらの世代に属する者で原図に記載されているのは664名で、その性別構成は男子77.7%, 女子20.9%, 性別不明1.4%, 性比3.71となっている。これはこの系譜集団内での通婚が生じた場合、女子の名前がこの系譜に記載されなかったこ

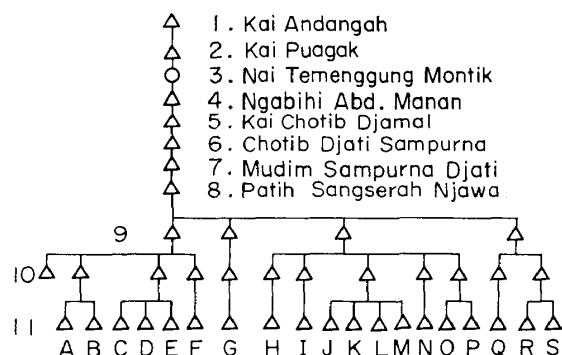


図6 チュンパカ・カンボン・スラウィの祖先の系譜

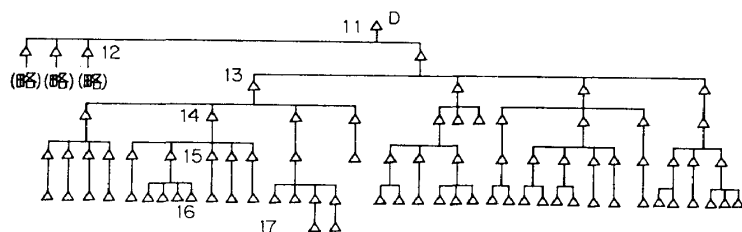


図7 チュンパカ・カンボン・スラウィの系譜の一部（男系のみを示す）

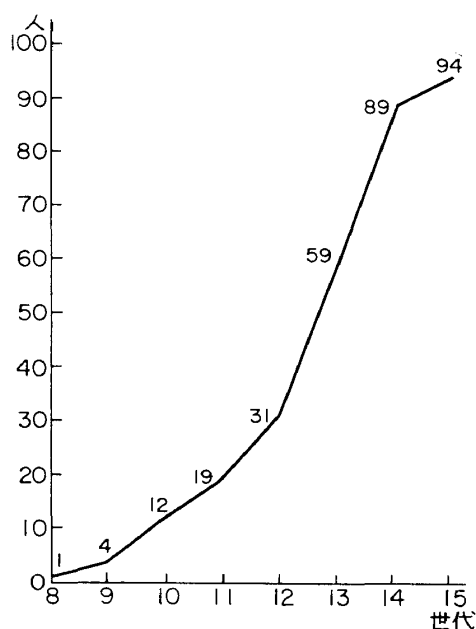


図8 チュンパカ・カンボン・スラウィ系譜における世代別男系子孫数

とななどのために生じたと考えられる。

女子人口のかなりの部分の系譜からの欠落

のため，ここでは人口学の通常の方法とは逆に男子人口に着目して系譜人口の処理を行なってみた。⁴⁾ この系譜に記載されていることの意味はおそらく次のごとくであろう。すなわち，系譜作成時に子供であった者の一部が含まれる可能性はあるが，

それ以前については記載された各人が既に成人に達していた可能性が高い。このことは乳幼児死亡者が系譜から省かれていることを意味する。系譜の中から女系に連なる子孫をすべて取り除くと男系系譜が残る。男系系譜における世代毎の人員数を数え，各世代の人員数を1世代毎におき換えられた子孫の数と解釈することによって，不完全ながら男子人口に関する一種の純再生産率を算出することができる。ただしここで利用できるのはある程度の人数があり，しかもそれが最終の人員とみなされる第11代から第14代についてである。世代のおき換えに要する期間を仮に30年とすると，この世代間の人口増加率はそれぞれ1.6%，2.2%，1.4%となる。この数値は死亡率の急激な低下に先行する時期のものとしてはきわめて高いといえる。かくしてカンボン・スラウィに関してはかなり早期において顕著な人口増加の傾向があったことが知られるのである。

VII 人口増加と土地利用

南スマトラ州における土地資源は，その種類と所在を問わなければ住民にとって無限に存在していたといえる。人口増加と土地利用の議論を行う場合，地域的拡大と集約化とが取りあげられるのが常であるが，この場合，地域的拡大は基本的に同一技術による面積拡張を意味し，集約化は同一土地の利用頻度の強化を意味する。異なった種類の土地を与えられた場合，そこに現われる選択には複雑な

様相が現われるのは当然といえるが，以下南スマトラにおける状況を三つの側面に分けて整理しよう。それらは(i)移動による同一空間の利用，(ii)土地利用法の変化にともなう定着化，(iii)異種の未利用地への新移動である。

ランボン系の住民の基本的な耕作法は焼畑

4) 複婚はきわめて少なく，この影響による子の数の増大はほとんど無視できると考えられる。男子の再婚は女子の再婚と人口学的に同義という仮定は必要である。

による陸稲耕作を主体とするものであった。集落は比較的小さく、それ自体移動性をもつと同時に、人口増加に応じて派生村を生み出した。ルンプインを経てカユアグンに至ったアブン系の民族はこのような経過をたどったと思われるし、ルンカヤップ、ブンガマヤンなどの集落もその伝承を保っている。ムシ川中流部からオガン川下流部へ移動したマレー系住民の場合にも、元来彼らが行っていた減水期稲作を移住地においても行なったという。⁵⁾ ムシ川下流部においても、低湿地なりに移動をとまう焼畑的な耕作法が採用されていたようにみえる。⁶⁾

移動的な焼畑耕作はその本質的要素を幾分保ちつつも定着化の方向へとむかってきた。山岳部においてはコーヒー園の拡張が著しいが、森林を焼いてコーヒーを植え付けると同時に1, 2年の間陸稲の栽培を行なうことが現在では一般的である。コーヒー自体が永年の作物であるためもはや移動は行われない。コーヒー園が開かれるにつれて村の近くに永久的な水田を構築することが多くなったとみられる。最近では丁字なども永年作物として採用されるようになってきた。⁷⁾

コムリン川中流から下流にかけては昔は比

- 5) ただしこの場合には移動の契機は集落人口の膨張ではなく政治的分裂に近いものである。
- 6) マレー語では焼畑稲作地のことを *huma* とよぶ。下流部において潮汐による河水を利用することがあっても、ルバックを利用しても、稲作地は *humo* (スバリック), *umo* (チンタマニス), *umě* (プムルタン) などとよばれることは、背景に焼畑の伝統をもつためと思われる。
- 7) ランボン族発祥の地とされるスカラブラックの近くには現在では水田が多い。ここに *Suwah* とよばれる平地があるが、その語源については *suwah* (焼くの意) なのか, *sawah* (インドネシア語の水田) なのか分からないという。言語学的な可能性は別として土着の者がこのような疑問をいだくこと自体、かつて焼畑が広く行われていたことを示す。

較的高い場所を選んで焼畑が営まれていたが、ある時点から低湿地での減水期稲栽培が導入された。⁸⁾ 他方、これらの地域では従来焼畑で陸稲を植えていた高みには、バナナ、ゴムなどを植えるようになり、最近ではみかん園も増加している。ムシ川下流部では最近になって従来の移動をとまう低地焼畑から、ブギス人の方法にならって移動を前提としない潮汐灌漑による水稻耕作を土着者も取り入れようとしている。

上述の変化は耕地の連作化と集落の定着化とを含んでいる。集落規模はこの段階においてきわめて大きなものの存在を許すようになる。ここで問題になるのは、連作という集約化の1側面が Boserup [1965] のいうように人口増加の結果として生じたのかどうかということである。水田の導入、ルバックにおける減水期稲作、下流部における導水路をとまう潮汐灌漑などはいずれも新技術の導入である。これらの技術がその有利性のゆえに導入されたのか、土地不足のためにやむなく利用されたのかに関しては決め手となる情報がない。土地不足のために利用されたとしても、とくに中流域のルバックの場合には従来利用されなかった種類の土地の活用が始まっていることに注意する必要がある。連作化は新しい種類の土地の利用に当たって採用された技術体系と土地の性質そのものの中に内包される性質を有しており、意図された行為というよりは結果としての集約化として捉えることができる。山岳部の水田に関しても同様の見方ができる。

低湿地を含む隣接する非使用地への進出は、別の見方をすれば、植民地経済体制における商品作物が従来の焼畑稲作の適地へ侵入した

- 8) チュンバカではルバック稲作地のことを *huma lobak* または *huma ronoh* (*ronoh* は低いという意味) という。ここにも焼畑との意識上の連続性が認められる。

結果とも考えられる。⁹⁾ この観点からすれば、上述の土地利用の変化は、経済的強制あるいは利益追求の結果である。ジャワの場合と異なりここでは強制栽培制度のような経済的強制が原動力となったというよりは、むしろ利益追求が原動力となってこの種の転換が生じたのかもしれない。この種の利益追求は近代的経営の理念にのっとって行われたものというよりは、ある意味では副業的・投機的様相を含みつつ行われたものであって、高値時に高生産をあげることはもちろん、生産調整の要求される低値時にも出荷を続けることによって、往時の大規模ゴム園経営者を悩ませたのであった。

利益追求および技術導入を考慮に入れると、従来の非利用地への進出とその結果としての集約化を人口増加だけから説明することは困難になる。しかしながら、チュンパカにおいて人口増加がルバックの本格的な開始以前にも著しかったこと、シラプラウパダン近辺においてルバックにおける減水期稲耕作の開始は集落毎にかなりのずれが認められることなどは、比較的高みの土地が利用されつくしていく過程を物語るものであって、間接的かつ限定された側面においては人口増加が変化の契機の一つとなったことが分かる。

近年においては、原居住地の人口圧のために異種の新天地を求めて移動する現象が目立つようになった。開拓する余裕があるという点で、南スマトラ州に土地自体の不足はないという冒頭の状況は存続する。山岳部においてはコーヒー園の開発が著しい。ラナウ湖付近においてはオガン川流域からのマレー系開拓民およびジャワ島からの自主移民などによって開発が進められてきた。山を焼いてコー

ヒーの苗木を植え、コーヒーの背丈が低い間は陸稲などを植える。水田を構築して水稻を栽培することは地形上の制約もあってこれらの新開拓地ではほとんど行われていない。スカブラック起源の諸族および下流部のマレー系諸族の居住地は川の本流または支流沿いに限定され、川から離れた丘陵地の利用は余り行われなかったのであるが、中流部に近いところではオガン地域からの移住者およびジャワ島からの自主移民によってこれらの土地のコーヒー園化や畑地化が進められている。バトラジャ・マルタプラ計画のように政府の手が加わって大規模な入植計画がこの種の土地に設定される場合もある。ムシ川下流部の未利用地には大量のブギス人のリアウ方面からの移動がみられる。彼らの耕作手法は導水路をとともなう潮汐灌漑による稲作である。オガン川沿いのマレー系諸族の間にもムシ川へ進出して同様の耕作方法を試みる者が現われてきた。他方、ムシ川下流部のデルタには政府による大規模な開発計画により、ジャワ人、バリ島人などを含む大量の外島移民が定着を始めている。

これらの近年における未利用地の開拓者は、オガン系および少数のコムリン系の者を除けば遠隔地からの来住者である。遠隔地からの来住者は前住地で身につけた耕作技術をもってきた。たとえばジャワ人はくわの使用とキャッサバの栽培を、ブギス人は精力的な伐採能力と導水路の構築をその特徴とする。これらの移住者においては土着の村落の首長の許可を得て限られた区域内で耕作するという制限を加えられているという事情も加わって、条件の悪い土地を耕作するにもかかわらず、連作的傾向が顕著である。そしてこの傾向は徐々にではあるが土着の諸族にも伝えられつつある。

コムリン川中流部においては土地自体はまだ十分に存在するにもかかわらず、パレンバ

9) Geertz はジャワの水田地帯に関して甘蔗栽培の強制的導入の結果を論じている。[Geertz 1966] ここでは彼が実際には十分に論じなかった焼畑地帯が取り扱われることになる。

ンやジャカルタへの移動が多い。ある程度の財力と教育があれば離村傾向が強くなる。都市生活の牽引力は強く、人口増加が直接に土

地とのかかわりを持たぬ状況が、土地を求めて来住するジャワ人の存在と対照的に現われつつある。

参 考 文 献

- Boserup, Ester. 1965. *The Conditions of Agricultural Growth—The Economics of Agrarian Change under Population Pressure*. London: George Allen & Unwin.
- Badan Penerbit Suara Rakjat. 1970. *Undang-Undang Simbur Tjahaja*. Palembang.
- Funke, Friedrich W. 1958 & 1961. *Orang Abung*. 2 Vols. Leiden: E. J. Brill.
- . 1972. Abung. In *Ethnic Groups of Southeast Asia*, Vol. 1, edited by Frank Lebar, pp. 35-38. New Haven: HRAF.
- Geertz, Clifford. 1966. *Agricultural Involution*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Jajasan Penerbit Karya Palembang. 1969. *Monografie Marga Kaju Agung*. Palembang: Jajasan Penerbit Karya Palembang. (Original mimeograph edition in 1932)
- Lipinsky, E.; and Kato, T. n.d. *Land Tenure and Village Administration*. Sumatra Regional Planning Study, Province South Sumatra. (Mimeographed)
- Marsden, William. 1811. *The History of Sumatra*. (Reprinted in 1975 by Oxford University Press)
- Moehammad Moeslimin. n.d. *Monografhie dari Marga Ranau dan Kisah Nyala Tentang: didapatnya "Sisik Naga."* (Mimeographed)
- . n.d. *Sekala Belak*. (Mimeographed)